



高知県室戸市三津自主防災組織  
リーダー 島村 三津夫

## 1 はじめに

三津自主防災組織（以下、「三津自主防」という。）は、高知県室戸市の室戸岬の東端にある人口470名の住民からなる防災組織です。2013年に組織を新しく立ち上げ、古くからある地域の出役や総会を復活させ、スムーズに活動ができるよう組織しました。リーダーの元に、13名の防災部長を置き、班の地形や構成員に合った活動をしています。

2年目から高知県と室戸市の総合防災補助事業・補助金を活用し、必要な資機材や食料・衣類を防災倉庫に入れ、南海トラフの地震発生の5分後に襲来するという津波に備えています。

## 2 すべての人が役割を

三津自主防の特徴は、すべての住民が「一人一役を負い」助け合いの気持ちで、月1回程度の避難訓練を兼ねた防災倉庫の物資の入れ替えを行っていることです。そのことで地区民に会話が生まれ、必要な物や様々なことの相談ができてきています。私たちは「日常生活の延長に防災活動を位置付けており」特別な活動ではなく、自然に気持ちと体が動くようにしています。12の班に避難路も整備され、高齢者は車いすで避難ができます。

## 3 日常生活の延長に

ソフト面で三津自主防が独自に考案したのが、「安全カード」「グループ避難」「ト

ランシーバーの活用」です。

安全カードは、表に氏名、住所、電話番号が、裏に個人情報の緊急連絡先、家族親族、かかりつけ病院、持病薬などが書かれていて、事故や病気で口がきけない時にもこのカードをみれば必要なことが分かるようになっています。外出や旅行時に携帯すると役に立ちます。

フリガナ	〇〇イチロウ	班	第1班
氏名	〇〇一郎	性別	男
生年月日	昭和〇〇年〇月〇日	血液型	A型
同居者	〇〇花子(妻)	〇〇太郎(父)	
	〇〇佳子(母)		
民生員	〇〇〇〇	常会長	島村三津夫

安全カード

グループ避難は、隣近所の3～5名が避難時に声を掛け合うようにしています。

トランシーバーは、被災時にリーダーと防災部長が状況を把握し合うのに活用しています。

避難場所の防災倉庫には、被災時に役立つ、発電機・担架・テント・炊飯用具などと、1週間程度の避難に耐えられるだけの食料・水なども配備されています。この準備を地区民全員でやりましたが、「備えあれば憂いなし」とはいえ、想定する災害は、東日本に甚大な被害を与えた大津波と同規模のものです。日頃から枕元にヘッドランプ、底の厚い靴を置き備えていても、とっさの行動ができるかは不安が残ります。夜間や夜中の避難訓練

など形態を変えた訓練と、泊まり込みの避難も必要です。



避難場所での作業



避難場所拡張作業

#### 4 お互いの交流が減災を

南海トラフ関係4県研修会では、「安全カード」の着用について和歌山県田辺市より申請がありました。テレビ各社や新聞の取材もあり、三津自主防の取組が西日本一帯に広がって行って、各地区の自主防が、お互いに交流を深めることが「防災・減災」につながる大切な要件だと思います。総務省消防庁の「第23回防災まちづくり大賞」の消防庁長官賞受賞を機会にもっともっと日本の自主防の交流を広め、深めて行きませんか。

#### 5 官民一体の取組

この受賞を植田壯一郎室戸市長に報告した際、室戸市全域で「安全カード」の携帯、福祉施設との連携、被災時体制の

構築について話し合いました。市長は早速、重要施設や津波被災地住民の高台移転の施策をとってくれています。官民一体となった防災を作るのは、自主防の使命だと思います。

#### 6 世界的視野での助け合い 日本から発信を

JICA（独立行政法人国際協力機構）主催の大洋州やカリブ地域の島しょ国の防災行政官を対象とした島しょ国総合防災行政研修の中で、昨年12月1日に三津地区の避難訓練の視察が行われました。その際に、島しょ国の人々の話を聞きました。彼らの国は、地球温暖化による海面上昇により国土水没の危機を抱えていて、火山帯の上に住んでいること、貧困国であることも重なって、常に命の危険にさらされていると知りました。早急に国際的救助組織を作り、助け合わないといけないと思います。



JICAの島しょ国総合防災行政研修による視察

「国境なき医師団」のような「国境を越えた災害レスキュー隊」がいち早く組織され、素早い災害対応が望めます。「防災まちづくり大賞」のような賞が日本国内だけでなく、国際的な防災組織に贈られるように関係各省庁と連携し、日本から世界に向けて防災の取組が進展することが望めます。